

〔研究ノート〕

新約聖書の原語についての議論（3）

浜 島 敏[†]

— 目 次 —

序

I. セム語原典説

1. 1世紀におけるパレスチナの言語事情
2. 福音の伝播
3. ギリシア語の役割 (以上、137号)
4. セム語原典説のさまざまな証言
5. 新約聖書の古い資料
6. 新約聖書に見られるセム語の特徴 (以上、前[139]号)

II. ギリシア語原典説（セム語説反対論） (以下、本[140]号)

III. 比較

1. セム語原典説とギリシア語原典説の比較
2. 考察

IV. セム語原典仮説

結語

[†] HAMAJIMA, Bin 四国学院大学名誉教授

Ⅱ ギリシア語原典説（セム語説反対論）

さて、これまでセム語原典説を中心に見てきたが、もちろん、これらの動きに警戒的であり、伝統的な考えを強く主張する学者も多い。

セム語原典説に対するギリシア語原典説の議論を簡単に見ていくことにする。

（1） 紀元1世紀のパレスチナにおいてはギリシア語が広く使われていた

① ギリシア語は、地中海地域の共通語としてかなり広範囲に使われていた。当時のエルサレムはかなりヘレニズムも進んでおり、ギリシア語がよく通じていたと言われている。パレスチナも例外ではない。特に、ガリラヤ地方は「異邦人のガリラヤ」（マタイ4:15）とも呼ばれ、デカポリスなどのギリシア都市が近く、ギリシア語を話すものが多かったと考えられている。イエスとその弟子たちはほとんどがガリラヤ出身であったことを考えると、たとえ母語でなかったとしても、かなり日常的に使っていたと考えられる。ナザレの北北西6キロには、ツィポリ（セフォリス）があったが、一時期、ヘロデ・アンティパスがここを首都と定めたこともあった。そのように、ガリラヤの中心都市であり、ヘレニズムが進んでいた。シナゴグでさえ、ギリシア神話のモザイクが施されているほどであった。新興都市であったツィポリには建設ブームがあり、大工であったヨセフもその建設に携わっている可能性さえあるという。また、マリアの両親がツィポリ出身だとも言われている。

② イエスは異邦人への伝道でギリシア語を使った

イエスは、ティルス、シドン、デカポリスなどに宣教に出かけている。また、ローマの百人隊長（マタイ8:5-）やシリア・フェニキア生まれのギリシア人の女性（マルコ7:24-30）と会話をしているし、また裁判の場面では、ピラトとも会話（マルコ15:2-15）をしているが、彼らがアラム語を話すとは思えないし、また通訳を使ったとも考えられないので、当然イエスが共通語であったギリシア語で話をしたと考えるのが妥当である。ピラトとはラテン語を使ったかもしれないが、ギリシア語はローマ帝国の政治言語としても使われていたので、おそらくピラトはギリシア語も使用することができたことであろう。また、ヨハネ12:20-36の記事では、数人のギリシア人がイエスに会いに来ていることから、イエスも弟子た

ちもギリシア語で話したと思われる。

③ 黙示録で、イエスが自分自身を、「私はアルファでありオメガである」とギリシア語を使って紹介しているということは、イエスがギリシア語を使用していた証拠である。

④ 福音は最初はほとんど口頭で伝えられた。書くことが必要となったのは、キリスト教に反対する人たち（主として異邦人）に、福音を弁護し、伝えるためであった。そのためにはギリシア語で書くことが必要であった。

⑤ 代表的な聖書記者（ルカとパウロ）は、いずれもギリシア語話者であった。

i) パウロ

a) パウロの出身地タルソスは小アジアの町で、ヘレニズムが進んでいた。最高のインテリの一人であるパウロが宣教をした場所は、ほとんどがギリシア語地域である。たとえ、ユダヤ人に対する宣教であったにしても、急速に異邦人キリスト者が増加したことを考えると、やはりギリシア語は必須であった。彼は、またヘレニストのユダヤ人ともギリシア語で話している（使徒9:29）。

b) 使徒21章から22章にかけて、パウロは千人隊長にはギリシア語で話し、民衆にはヘブライ語（アラム語）で語っている。使徒14:11の「リカオニアの方言」が何語を表しているのか不明。

c) パウロの手紙に、名前が挙げられている人物は、ギリシア名がほとんどで、エフェソ教会ではプリスキラとアキラというラテン名の人物があげられている。

d) 使徒18:17によれば、会堂長ですら、ギリシア名を持ったソステネであったと伝えられている。パウロがギリシア、パルテア、ガリア、ローマなどで宣教したことを考えると、わざわざアラム語を使う意味がない。

ii) ルカ（ルカ伝と使徒言行録著者）もテオフィロ（「神を愛する者」を表すギリシア語名）当てに書いているが、これが特定の個人なのか、あるいは一般的な人なのかははっきりしない。ルカスという名前自体ギリシア語であり、彼がギリシア人であるとも言われている。いずれにせよ異邦人クリスチャンであり、医者である。そのギリシア語文体は大変優れている。

（新共同）敬愛するテオフィロさま、・・・

（リビング初版）神様を愛する親愛なる友へ・・・

iii) 教父たちはその著作をほとんどギリシア語で書いている

⑥ イエスにはアンデレやフィリポのようなギリシア名の弟子がいたことから、人名にもギリシア語を使うほど、ガリラヤでギリシア語が普及していたことが分かる。ケファ（アラム語）もペトロ（ギリシア語）で呼ばれるようになったこともこれを証している。何よりもイエス自身も、「メシア」ではなく、「キリスト」とギリシア語で知られている。

⑦ ユダヤ人墓碑銘のほとんどがギリシア語で書かれている。
ユダヤ人の墓碑銘として書かれているのは、70%がギリシア語、12%がラテン語、18%がヘブライ語（またはアラム語・シリア語）である。ただし、この数字はディアスポラの墓も含めているので、当然ギリシア語が多いことになる。しかし、パレスチナだけをとっても、およそ3分の2の碑文がギリシア語である。（Biblical Archaeology Review）。

（2）旧約聖書の引用が七十人訳に基づいている

ディアスポラ、特にアレキサンドリアでは、ギリシア語が広く用いられていたと考えられる。また、新約聖書における旧約聖書の引用の多くが、ギリシア語七十人訳であることも、その理由として挙げられている。

（3）引用のヘブライ語について、わざわざギリシア語への翻訳がなされている箇所が多いことは、ギリシア語読者のためであって、そもそもギリシア語読者のために書かれたことを示唆している。マタイ1:23などを参照。もともと、セム語で書かれていれば、翻訳する必要はない。それをギリシア語に翻訳するにあたって、イエスなどの発したセム語をギリシア語に翻訳したらこれこれの意味である、という解説を加えていることになる。

（4）初期250年間のキリスト教文書の著者は、ギリシア語を用いて書いていた。教父たちの引用は豊富であって、その引用だけを集めても、新約聖書の本文が復元できるほどである。

（5）古代新約聖書の写本（特に古いもの）は、ほとんどがギリシア語（5500）である。

Ⅲ 比較

1. セム語原典説とギリシア語原典説の比較

セム語原典説とギリシア語原典説のそれぞれの主張を挙げてみたが、それらを併記して列挙・比較する。セム語原典説をS、ギリシア語原典説をGとそれぞれ省略する。

① 1世紀のパレスチナ地方の日用言語

S 日常語としてはアラム語（ヘブライ語も）が使われていた。ギリシア語は敬遠されていたし、時には禁じられていた。

G アラム語が日常語であったとしても、ギリシア語も広く話されていた。祭司階級などもギリシア語を用いていた。ギリシア語を用いるユダヤ人はヘレニストと呼ばれていた。

判定：どちらの主張も、妥当な面があり、どちらとも決め難い。資料としてはSが豊富である。

② イエスと使徒たちの使用語

S ギリシア語もTPOに応じて用いたであろうが、基本的にはアラム語を話していた。

G ガリラヤ地方は、ギリシアやローマの都市が近くに多くあり、ギリシア文化が強かったので、ギリシア語を話すものが多かった。また、黙示録の中ではイエスが自身を「アルファ」であるとか「オメガ」であると、ギリシア語で紹介していることは、イエスがギリシア語を使っていた証拠である。

判定：客観的に考えるならば、Sに理がありそうであるが、断定はできない。Gがギリシア語を使っていたという証拠に「アルファ」と「オメガ」を出しているのは、あまり意味がない。

③ 新約聖書記者たちの教養

S 弟子たちは比較的教養の低い身分の者が多く、ギリシア語を取得していたと考えるのは困難。

G パウロやルカなどの教養人は、ギリシア語も自由にできた。

判定：Gの主張はおそらく正しい。ただ、だからと言って、ギリシア語で書いた

という証拠にはならない。漁師たちの教養を考えるならば、逆にヘブライ語であつたら書くことができたのか自体にも疑問がある。超自然の力によって、外国語を使う能力が与えられた（ペンテコステの事件のように）と考える学者もいるが、論拠とはなりえない。

④ 原典

S イエスの言葉がアラム語でそのまま伝えられている。1世紀にすでにシリア語の聖書があつたことは知られている。ギリシア語はその翻訳である。

G 原文は最初にギリシア語で書かれ、それがアラム語やシリア語にも翻訳された。

判定：イエスの言葉がそのまま伝えられていると考えるのは無理があるが、その思想はセム語でよりよく伝えられているだろうことは予想できる。だからと言って、セム語が原典であるという証拠にはならない。

⑤ 正統性

S 使徒が書いたものがそのまま伝承されており、ヘレニズムに毒されていない。

G 東方は、多くの異端の発生したところで、西方が正統である。

判定：そのまま伝承されていることについては証拠がない。旧約聖書は写本の作成に非常な注意を払ったが、もし同じようなことがあれば、その可能性がないとは言えない。逆に東方を異端と決めつける西方にも問題がある。

⑥ 写本

S 4世紀以後の比較的新しい写本が中心。『ディアテッサロン』などの記録はあるが、現物の写本はない。最も古いのが、古シリア語で、2世紀後半と言われている。アラム語、ヘブライ語、シリア語などの写本がある。400ほどの写本がある。

G 1、2世紀の写本（断片）もあり、古いものもある。中心は4世紀以後。アレキサンドリア系、ビザンチン系などがある。また、写本数も、5000を超えている。

判定：古いギリシア語写本（特に古いもの）は、アレキサンドリア系が多い。資料としては、Gの方が決定的に多数である。その分、異読も多い。ただ、マソラ本文が9世紀以前のものはないにもかかわらず、その信頼性が高いのは、その筆写の正確さによるとされているが、新約聖書もある時期からかなり丁寧に行われたのではないかと考えることもできる。「聖典」を尊ぶ姿勢は、セム語文化に共

通にあったかもしれない。ある主張によると、シリア語でも聖書は、古いものは破棄されていたということである。確かに、写本の異読は、セム語の方が圧倒的に少ないという統計がある。

⑦ 異読

S ギリシア語には異読が多いが、セム語（シリア語）には異読が少ない。

G ギリシア語に異読が多いのは、それぞれの地域のギリシア語（方言）が反映されているからである。また、異読が少ないということは、逆に管理されていることの証拠であって、シリア語が原典でないことを表している。

判定：これについては、Gの方がより客観的で納得できる。

⑧ 考古学

S 碑文や、貨幣にヘブライ語が多く用いられている。

G パレスチナにおける墓碑銘の三分の二はギリシア語である。

判定：どちらとも決め難い。

⑨ 教父

S 教父たちが、ヘブライ語で書かれたと証言している

G 教父たちが、ギリシア語で聖書を引用している

判定：本文そのものが失われても、教父たちの引用をつなげていけば、新約聖書全体を復元できる、と言われることがある。しかし、現実にはそれは無理である。Sについての教父たちの証言は、ほとんどマタイ伝に限られている。したがって、マタイ伝だけはセム語起源と考えることができるかもしれないが、それも決定的ではない。

⑩ 誤訳

S 原典のヘブライ語の理解不足がギリシア語に影響している。またヘブライ語の誤読による誤訳がある。

G ギリシア語が原典であるので、誤写はあるかもしれないが、誤訳はない。

判定：確かに、ヘブライ語にしてみても、初めて理解が可能であったり、深まったりすることがある。が、それがヘブライ語原典になるかどうかは、分からない。書かれていなくても、背後にヘブライ的語法が含まれることは十分ありうる。

⑪ 初期宣教の対称

S ユダヤ人が中心（シナゴグ）

G 異邦人が中心

判定：当初は、ユダヤ人中心であったことは、間違いないであろうが、その後急速にギリシア語社会にも宣教は及んだと思われる。

⑫ 旧約聖書の引用

S ヘブライ語原典から

G ギリシア語七十人訳から

判定：どちらからの引用もある。もちろん、どちらからの引用であっても、大部分は共通であり、どちらか一方を原典と判断することは困難である。ただし、全般的には七十人訳からの引用と思われるものが多い。

2. 考察

セム語原典説には、そう思わせるような状況は十分あると考えられるが、この説の決定的な弱点は、直接一次資料がないことで、すべてが状況判断に過ぎないことである。決定的判断をするには弱すぎる。多くの伝承があるが、それはやはり歴史的資料としては、あくまでも二次資料に過ぎない。ギリシア語には1、2世紀の写本が次々見つかったのに、セム語では、1世紀には、すでにシリア語の新約聖書があったという証言はあるものの、原文がない。現存する最も古い写本でも、2世紀以前にはさかのぼれない。

(1) 地理的に考えて、エルサレムから北と南に分け、アレキサンドリアを中心とするアフリカ地域を、一つのグループと考え、もう一つをシリアから小アジアを含め、またそこから東に向かった北部グループとして、初期キリスト教を整理すると、一つの仮説が成り立つかもしれない。もともとセム語で書かれた新約聖書は、北部はその原文をそのまま維持し続けていたが、アレキサンドリアを中心にしてまずギリシア語に翻訳されたと見るのが可能となるかもしれない。アレキサンドリアはヘレニズムの進んだ地方であり、旧約聖書のギリシア語訳が行われた場所であり、そこで新約聖書が翻訳されたとしてもあながち無理な見方とはいえない。古いギリシア語のパピルス写本がほとんどアフリカから見ついているのもそのことを証明するかもしれない。そのためにはコプト語など、アフリカ諸語の古い翻訳との共通点を検証することが必要であろう。

(2) 北部のセム語とギリシア語公認本文との共通点が見られると面白い発見があるかもしれない。北部ではセム語が中心であって（もちろん、この間、ギリシア語やラテン語などの古い翻訳がなかったということではない）、4世紀、キリスト教が公認されるとともに、セム語から公にギリシア語に翻訳され、それが公認本文として形を整えていったという一つの仮説にはなりうる。この場合は、アラム語やシリア語だけでなく、アルメニア語や古代ペルシャ語などとの関連も研究の対象としなければならない。いずれにしても、これらのセム語、アルメニア語、（ゴート語）などと、公認本文との強いつながりが証明されれば、現在の本文批評の一般的な流れに逆らい、公認本文をより重要視する立場を擁護することになる可能性が十分あるものと思う。そして内容だけに限らず、時期的にもセム語原典説を支持することになるかもしれない。

今回、セム語原典説に焦点を合わせて書いたが、この中でセム語聖書と景教文書と重なる部分があれば、景教研究もさらに進むことであろう。特に、ハブール写本やイシオダッドやイブン・アル・タイブの注解が、何らかの手がかりになるかもしれない。ただしアル・タイブのものについては、今のところ日本語はもちろん、西欧語にも翻訳がなされていないので、アクセスが困難である。翻訳されることを期待している。

IV セム語原典仮説

それぞれに主張があり、どちらかの確実な結論を出せるほど、決定的な証拠はない。しかし、最後に、あえて、かなり大胆な仮説を提示したい。セム語原典説を仮説として私見を述べてみたい。

(1) 新約聖書はもともとセム語で書かれた。その原本はセム語のまま東方に伝えられた。一方、ヘレニズム文化の中心地となっていたアレキサンドリアに伝えられると、すぐにギリシア語に翻訳された。そしてアフリカを中心にしてギリシア語の新約聖書が旧約聖書七十人訳とともに広まった。ヘレニストの間ではアレキサンドリアがキリスト教の一つの中心地となった。それに対し、北に向かったキリスト教は小アジアからヨーロッパに伝えられたが、パウロも含め、ごく初期はユダヤ人の会堂を足場としてまず伝えられた。使徒言行録には、ギリシアにお

ける宣教活動が詳しく書かれているが、それは異邦人伝道を強調するために特別に書かれているものであるからで、初期宣教の中心はユダヤ人であった。不思議と古いギリシア語写本のほとんどはアフリカで発見されている。小アジアからギリシアでは、あまり見つかっていない。積極的にギリシア語に翻訳されなかったのではないか。

(2) 4世紀、コンスタンチヌスが皇帝となり、キリスト教を認めるとなると、公式に聖書が必要となる。コンスタンチノーブルは、地理的にギリシアに近く、言語的にはギリシア語帝国であり、ギリシア語聖書が必要となった。そこで、至急アレキサンドリアより、ギリシア語聖書を取り寄せて、これを筆写させたのではないか。パチカン写本やシナイ写本は、この流れを汲むものであるが、これらの写本の中には、セム語新約聖書では含まれたことのない文書（クレメンスの書簡など）も含まれているし、旧約についても外典が入っているということは、アレキサンドリア系のものであった可能性が高い。

後に、コンスタンチノーブルにおいて、さらに新約聖書の研究が進み、セム語からの新しい翻訳も作られ、次第に整えられていったのが、公認本文ではないか。公認本文とセム語新約聖書はいくつかの共通点があるのはそのためではないかと考える。

これは、まだ単なる憶測に過ぎない点が多く、自分の主張として確信を持って述べるまでは至っていないが、可能性として考える価値があるのではないかと考えて、一石を投ずる。

(3) もし、これが事実となると、今までの新約釈義に決定的な打撃を与える可能性がある。たとえば、「愛」について、その種類を述べることで一冊の本ができるほど詳しい研究がなされ、ヨハネ21章にあるペトロとイエスの対話についても、この解釈によって説明がなされる。すなわち、「アガパオー」を使用したイエスに対して、「フィレオー」でしか答えられなかったペトロの告白、さらにイエスが三度目にはわざわざ「フィレオー」を使って質問したことの意味を求めようとしているが、これは単に翻訳者の解釈であって、イエスご自身の発想ではないことになる。あるいは、動詞が「未完了」であるか「完了」であるか「アオリスト」であるかなどが議論されるが、あまり意味を持たなくなる。いずれにしても、そのよって立つところが変わってくる。しかし、実はこれも容易ではない。

というのは、これまで新約はギリシア語で書かれたということしか考えられていなかったもので、セム語の新約聖書本文の研究がほとんどないからである。どの本文が信頼できるのかもわかっていない。現在使われているセム語の新約聖書の多くは、ギリシア語からの翻訳である。もっと古いセム系言語、あるいはペルシャ語、アルメニア語、さらにコプト語などの研究が必要になってくるかもしれない。しっかりした本文が決まらない限り、釈義そのものが信頼できないからである。

(4) 神学校のカリキュラムも見直す必要が出てくる。プロテスタントの神学校は、ギリシア語に力を入れてきた。ヘブライ語は旧約の研究に携わるとく少数の人たちに必要とされていた。しかし、今後はギリシア語よりもヘブライ語の学習がより重要になる。キリスト教の歴史を考える場合、ラテン語の学びも重要であるが、プロテスタントの神学校では、これまでは「本気でキリスト教史を勉強しようとしたら、ラテン語も必要だ」とは言われつつも、ラテン語を教えるプロテスタントの神学校は私の知る限りあまりない。将来は、ギリシア語も「キリスト教史を学ぶのであれば、ラテン語やギリシア語もやっておいた方がいい」という程度になる可能性がある。それよりも、タルムードなど研究の方が重要になるかもしれない。あるいは、今まで知る者もいなかったし、知っていても「異端」の解釈として葬り去られていたイシオダッドやイブン・アル・タイプのコメンタリーの方が重要になる可能性もある。

(5) もう一つの影響は、現在、四福音書のうち最初に書かれたのがマルコ伝でありマタイやルカはそれを参考にして、自分の資料を加えたという立場をとる学者がほとんどであり、それが一般的な考えである。翻訳の中には、歴史的に「書かれた順」に並べるとして、マルコ、マタイ、ルカ、ヨハネの順に並べているものもあるほどである。しかし、教父たちの証言に基づけば、むしろ最初に書かれたのは、マタイ伝であることになる。セム語原典説はこれを支持している可能性がある。

筆者は、2012年5月に韓国で開催された「国際景教研究大会」に出席したが、韓国では、景教の見直しが進んでいて、むしろ「パン・アジア・キリスト教」という名称を使い、東に向かったキリスト教全体像をつかもうとしていることが分かった。ある発表者は景教を英語でNestorianと呼び、「ネストリウス」派であると決めつけたことが、そもそもの誤りで、東方キリスト教は、もっと幅の広いものであり、ネストリウス以前のキリスト教もアジアには広まっていると主張し

た。また、ネストリウスの残された文献からは、彼が言われているような異端的な考えは見つかっていないとも言われた。また、一人の発表者は、西方に向かったキリスト教は、自己防衛のためとは言え、他を排除し、否定するために教義を発達させた。その教義は往々にして迫害の道具にさえなった。それに対して、東方に向かったキリスト教は、常に迫害され、迫害から逃れるということで、教義をまとめ発達させる余裕がなかった、と述べられた。おそらく、それが東方キリスト教の弱みでもあると言え、そのために、やがて弱体化し、消滅するという結果を生んだのであろう。しかし、キリスト教の全体像を見るためには、むしろ東方を除いてはならないし、むしろ東方の中にこそ、原キリスト教の姿が見られると言えるであろう。そもそもキリスト教は東洋のイスラエルで発生したものである。ケネス・ベイリーは『ヤコブと放蕩息子』の中で、「レバノン人は一千年間フランス語を話してきました。しかし彼らはレバノン人であってフランス人ではありません。亜大陸のインド人は英語を広い用途に使っています。・・・インドの国会すら英語で運営されています。・・・しかしインド人はインド人であって、英国人ではありません。・・・イエスはユダヤ人であってギリシア人ではありませんでした。」と書いている。我々はキリスト教の本質を知るためには、ヘブライ語とユダヤ文化をもっと深く知る必要があることだけは、はっきり確信を持って言うことができる。

結語

新説に対しては、一般的に二つの反応が考えられる。一つは、これが伝統的解釈に反するということで、一も二もなく反対し、中には、このようなことを考えること自体、神に対する冒瀆で反逆であり、悪魔の働きであるとする見解である。そして、今一つは、鬼の首を取ったかのように、検討もせずに飛びつくという追従派的な反応である。軽率であることはなほだしい。このような新説を提唱する者は、客観的で学究的な視点より、自分の発見を宣伝する伝道者になっていることが多く、これに踊らされてはならない。我々はあくまで客観的な視点を失うことなく、しかし伝統にとらわれない柔らかな頭脳でこれに対応すべきであろう。特に、このような研究が聖書の言葉に異議を唱える不埒な輩と考える頑固な保守的伝統主義者には、人間の作り出してきた「誤りある」神学ではなく、「誤り

のない」神の言葉である聖書そのものに権威があることを訴えたい。神の息吹を受けた原著者の原典に少しでも近づきたいという真理探究の試みなのである。聖書に誤訳があるなどと言うと、無謬派にはとんでもないことと映るかもしれない。しかし、「神の靈感を受けた」原典でない限り、人間の引き継いだものには過ちが入り込む可能性があることを十分素直に認め、可能な限りの知識と敬虔な祈りをもって、原典に近づこうという願いは尊いものであるはずである。

実は神は原典を残されなかったのだと筆者は思っている。律法の2枚の板も、最終的には失われることを許された。神が残すことを望まれたら、それは簡単にできたはずである。当時の記録は歴史的な記録として各地に残っている。ハムラビ法典などは、アブラハムと同時代だとされており、モーセよりもずっと以前にさかのぼる記録である。また写本ですら、死海写本など紀元前にさかのぼることのできるものも多数残っている。マタイやパウロの書いたものが残っていても全く不思議ではない。にもかかわらず、それを残しておられないのは、それら自体が偶像化してしまう危険性が強いからである。人は、目に見えるものをすぐ偶像化する。また偽造品が生まれる可能性もあった。世界各地にキリスト教遺物というものがあるが、そのほとんどは偽造品と言ってよい。中には本物もあるであろうが、偽物と区別することはほとんど不可能であり、その証明は困難である。有名な聖骸衣などのように、今なお議論され、決着はついていないものもある。また聖櫃のありかを求めての伝説さえ生まれる。神はそれよりも信仰によって御言葉を受け入れる方を良しとされたのである（もちろん、将来いつか神がそれを必要とされれば、それを見せてくださるかもしれないが）。

結果的には、大山鳴動しただけで、何も出てこない中途半端なものになってしまった感は拭えず、筆者としても歯がゆいものになってしまった。研究者として筆者自身が戒めている「軽率であることはなはだしい」セム語原典説推進派の「伝道者」になってしまっていることを告白しなければならない。要するに、ギリシア語原典説を論破するだけの論拠を見つけることはできなかった。ただ、一つだけ言えることは、教会史、教理史を含め今までのキリスト教研究が、西側に偏りすぎていたことは確かであり、今まで以上に東方のキリスト教を、先入観に捕らわれず、根本から見直し、再検討・再評価する必要性と、その重要性は確認できたと思っている。今後、これらの研究が進められることを期待しつつ、ひとまず筆を置く。

参考文献

エウセビオス著（秦剛平訳）『教会史』（全二巻）、山本書店、1986-87。

エイレナイオス3『異端反駁Ⅲ』（「キリスト教教父著作集3/1」）、教文館、1999。

長窪専三『古典ユダヤ教事典』、教文館、2008。

ビヴィン、ダヴィッド他（河合一充訳）『イエスはヘブライ語を話したか』、ミルトス、1999。

ベイリー、ケネスE.（森泉博次訳）『ヤコブと放蕩息子』、教文館、2006。

———、（泉弘次次訳）『中東の目から見たイエス』、教文館、2010。

ヘルマン他（樋口進訳）『よくわかるイスラエル史』教文館、2004。

ヨセフス『ユダヤ古代誌』（秦剛平訳）、ちくま学芸文庫、2011。

前島誠『ナザレ派のイエス』、春秋社、2001。

Benner, Jeff A., *The Living Words, A Study of Hebrew Words and Concepts from the Old and New Testaments*, Virtualbookworm.com, 2007.

Biviin, David, *New Light on the Difficult Words of Jesus*, En-Gedi Resource Center, 2007.

Black, Matthew, *An Aramaic Approach to the Gospels and Acts*, Hendrickson, 1967.

Douglas-Klotz, Neil, *The Hidden Gospel*, Quest Books, 1999.

Elias, Joseph, *Living Words, The Words of Christ in Aramaic-English Interlinear Edition*, Arion Press, 2002.

Enlightenment from the Aramaic, Yonan Codex Foundation, 1993.

Errico, R.A., *Let there be Light*, Noohra Foundation, 2008.

———, *Aramaic Light on the Gospel of Matthew*, Noohra Foundation, 2001.

———, *Aramaic Light on the Gospels of Mark & Luke*, Noohra Foundation, 2001.

———, *Aramaic Light on the Gospel of John*, Noohra Foundation, 2002.

———, *Treasures from the Language of Jesus*, DeVorss, 1993.

Fitzmyer, J.A., *The Semitic Background of the New Testament*, Eerdmans, 1997.

Gibson, M.D., *The Commentaries of Isho'dad of Merv... Vols 1-3*, Cambridge, 2011.

Gordon, Nehemia, *The Hebrew Yeshua vs. the Greek Jesus, etc.*, Hilkiah Press, 2006.

Koester, Helmut, *From Jesus to the Gospels*, Fortress Press, 2007.

Lamsa, G.M., *Idioms in the Bible Explained...*, Harper One, 1985.

----, *Gospel Light*, The Aramaic Bible Society, 1999.

Nersessian, Vrej, *The Bible in the Armenian tradition*, The J. Paul Getty Museum, 2001.

Pick, Bernhard, *The Gospel According to the Hebrews*, Kessinger (出版年不明).

——, *The Gospel of the Ebionites*, Kessinger (出版年不明).

Roberts, Alexander, *Inquiry into the Original Language of St. Matthew's Gospel*, Wipf & Stock, 2009.

Wilson, Marvin R., *Our Father Abraham, Jewish Roots of the Christian Faith*, Wm Eerdmans, 1989.

Greek New Testament, including: Textus Receptus, etc., Hephaestus Books(出版年不明).

Internet Materials.

Aramaic New Testament (http://en.wikipedia.org/wiki/Aramaic_New_Testament).

Aramaic primacy (http://en.wikipedia.org/wiki/aramaic_primacy).

Aramaic Primacy, Hebrew Primacy & Dump the Greek (<http://www.seekgod.ca/forum/showthread.php?tid=292>).

Categories of New Testament manuscripts.

(http://en.wikipedia.org/wiki/Categories_of_New_Testament_manuscripts).

Comma Johanneum (http://en.wikipedia.org/wiki/Comma_Johanneum).

Complete List of Greek NT Papyri (<http://www-user.uni-bremen.de/~wie/texte/Papyri^list.html>).

Greek Primacy (/http://www.enotes.com/topic/Greek_Primary).

Hebrew Idioms in the New Testament (<http://foundationsmin.org/studies/idioms.htm>).

List of major textual variants in the New Testament (/http://en.Wikipediaorg/wiki/List_of_major_textual_variants_in_the_New_Testament).

The original language of the New Testament was Greek' (<http://www.sacredname movement.com/NTisGreekContents.htm>).

Primacy and Possibility (<http://orvillejenkins.com/theology/primacyandpossibility.html>).

Rabbinical translations of Matthew (http://en.wikipedia.org/wiki/Rabbinical_translations_of_Matthew).

Rabbinical Jewish Versions (http://en.wikipedia.org/wiki/Rabbinical_translations_of_Matthew).

Refutation of Peshitta Primacy (http://fontwords.com/thoughts/refutation_of_peshitta_primacy.pdf).

The Semitic New Testament, the plot to replace the Greek New Testament'(<http://watch.pair.com/peshitta.html>).

Syriac versions of the Bible (http://en.wikipedia.org/wiki/Syriac_versions_of_the_Bible).

Thoughts on Aramaic Primacy (<http://orvillejenkins.com/languages/aramaicprimacy.html>).

聖書（行末かっこ内は表で用いた省略形）

Hebrew Gospel of Matthew, (Howard), Mercer University, 1995 (HW).

シェム・トーヴ・ヘブライ語

The Aramaic Gospels and Acts, (Pashka), Xulon Press, 2003 (PS).

アラム語

The Delitzsch Hebrew Gospels, Vine of David, 2011 (DL).

デリッチ・ヘブライ語

Aramaic English New Testament, (Roth), Netzari Press, 2010 (RT).

ハブール写本・アラム語

The New Testament, (Murdock), Gorgias Press, 2001 (MD).

シリア語ベシッタ（ディアテッサロン参照？）

The Hebraic-Roots Version Scriptures, (Trimm), Institute for Scripture Research, 2005 (TR).

シェム・トーヴ・ヘブライ語

Aramaic New Testament, (Alexander), ?, 2010 (LX).

アラム語

The Gospels, Tree of Life, 2011 (TL).

このために特別編纂された本文（ネストレで修正）

Holy Bible from the ancient Eastern text, (Lamsa), Harper & Row, 1968 (LS).

古代ベシッタ（モーティマ・マッコリー写本）

Aramaic Peshitta New Testament Translation, (Magiera), LWM, 2006 (MG).

英国内外聖書協会のシリア語新約聖書を使用

The Aramaic-English Interlinear New Testament, (Bauscher), Lulu, 2009 (BS).

アラム語ペシッタ、ギリシア語公認本文との一致を強調

The Earliest Life of Christ, The Diatessaron of Tatian, (Hill), gorgias, 2001.

福音書調和

The Old Syriac Gospels, (in 2 vols), (Wilson), Notre Dame University, 2003 (WL).

古シリア語（シナイ・パリンプセスト、クレトニア写本）

B'Sorot Matti, (Trimm), 2009(DT).

DuTillet Textより翻訳

MatitYahu, (mistranslated Matthew), (TE).

1553年に教会当局から没収されたdu Tillet写本より翻訳

The Old Syriac Gospels, (Burkitt)(BK), Worldwide Nazarene Assembly of Elohim, 2011.

The Message of Matthew, by Rocco A. Errico,(ER) 1996, Noohra Foundation.

ペシッタ・アラム語と英語の対訳、詳しい注がある。

The Earliest Life of Christ ever compiled from the Four Gospels, being the Diatessaron of Tatian (cir. AD.160).

Literally translated from the Abu al-Faraj Abd Allah ibn al-Tayyib, General Books, 1910.

Berorat HaMashiach, *Good News of the Messiah*, (World English Bible Messianic Edition), 2003.

メシアニック・ジューによる翻訳。ネストレ校訂版より翻訳

The Orthodox Jesish Bible, AFI International Publishers, 2010.

Khabouris Codex (<http://dulshrana.com/khabouris/>) (Lindgren)(LG).

Peshitta (<http://www.peshitta.org/>) (Younan)(YN).

The Diatessaron of Tatian (<http://mb-soft.com/believe/txua/diatess.htm>) (HG).

Diatessaron (http://christianbookshelf.org/hogg/the_diatessaron_of_tatian/title_page.htm) (HG).

Didache (<http://reluctant-messenger.com/didache.htm>).

山浦玄嗣『ガリラヤのイエシュー』、イービックス、2011。

その他、各種日本語、英語訳聖書参照。